

「祝福って何？」

民数記 第6章 22節～27節

説教 本庄侑子伝道師

見渡す限り荒れ果て、涸れ果てた地。このまま歩き続けて本当に良いのかと思う様な場で、かつて、力強い宣言が神によってなされました。それは、祝福の声でした。

民数記は民の数を数えているので、《Numbers》と呼ばれています。しかし、《荒野にて》と言うのが元々のタイトルです。荒野に於いて神がなされた事は民の数を数える事でした。モーセに数を数えさせるのです。ひとりひとりを大切に数え上げられたのです。これは、神のものとして握りしめて祝福を受け取らせる為です。

教会はいつも絶えず、神に祝福を祈り求めて歩んで来ました。教会が祈り求める様になったきっかけは、神が『この様に言いなさい。』と、仰った事から始まります。礼拝の最後の祈り、《アロンの祝祷》(民数記 第6章22～27節)です。

我々を造られた神は、『私があなたを祝福する。守る。』と仰り、〈あなた〉というひとりを目がけて祝福の宣言をなさいます。この神からの約束は、今も変わりません。神は断言します。『私があなたを祝福し、あなたを守る。』と。この宣言を教えられたモーセは、40年に亘って神の民を率い、荒野の中を歩きます。自分の力で歩くのではなく、神に頼り生きて行くのです。人生の終わりも、その荒野で迎えます。主は荒野でモーセを「見いだし」、「囲い、いたわり、御自分のひとみのように」守られました。(申命記 第32章10節)

「ひとみ」は、弱く脆いものです。小さな傷が入っただけでも致命傷です。神は「獣のほえる不毛の地」(申命記 第32章10節)で生きている様な中で、守り通されました。やがて、モーセは天に召されます。このモーセの人生は波瀾万丈であり、平穏なものではありませんでした。イスラエル人でありながら、エジプトの王宮で育ちますが、やがて殺人逃亡犯として、第二の人生を送ります。しかし、80歳の時、神から声を掛けられ、指導者として立てられます。

モーセの人生は、その後も激動であり、エジプトの王に追われ、命を狙われるのです。そこから、なんとか脱出するものの、仲間からは恨まれ、40年もの日々を過ごしました。しかも、約束の地を目前に、その地に入る事が赦されず、モーセは人生を閉じます。それは、人々に理解されず、孤独で挫折の多い人生でした。しかし、

モーセにとって神の約束の言葉は真実であり、その人生は神に祝福され、ひとみの様に囲い守られていた、という一点に尽きました。

レビ記には、神に捧げる礼拝の仕方、生活の仕方が記されています。これは神が我々ひとりひとりに造って下さった道筋です。我々は本来、神との関係の中で生きる筈であったのですが、「主なる神の顔を避けて」(創世記 第3章8節)生きているのです。隠れる様にして生きる罪人です。人が神抜きで生きる時、隣人との関係も断ち切ってしまう。我々自身の関係を破壊しあいます。その様な我々が隠れている事ができなくなり、神と、目と目を合わせなければならぬ時、神を裏切り続けて来た事を我々は知ります。我々は、神に対して顔を上げる事ができないのですが、神の方から顔を向けて下さると宣言し、もう一度顔を上げて神に向かえる様に赦し、愛して下さいます。

誰ひとり、神からの祝福を取りこぼす事が無いようにと、我々には神のひとり子、イエス・キリストの十字架の救いが与えられ、ここに神からの祝福の通路が拓かれます。それ故、我々は生きる事ができます。神が、御自身のものとして取り戻したひとりひとりが、ここにいます。今、神が見つめて下さり、赦し、愛して、ひとみの様に守って下さっています。我々の人生にも、様々なできごとがあります。不条理なできごとがあるのです。しかし、それでもなお、神の愛の宣言に任せて良いのです。

洗礼を受けるという事は、この神に人生を委ねて生きるという事です。順境にあっても、逆境にあっても、恵みと平安に満たされて生き始めるのです。洗礼を受けた後も、我々は眩し、焦る事があります。しかし、神は御自身のひとみの様に守って下さるのです。今は「おぼろ」であり「一部しか知らなくとも」、神と「顔と顔を合わせて見る」終わりの日、私たちは「はっきり知る」こととなります。(コリントの信徒への手紙Ⅰ 第13章12節)あの時も、この時も、神は私を見つめていて下さったということ。私の人生は神の祝福に満たされ、豊かに用いられていたということ。あなたは、愛されています。神の約束は、揺らぐ事はありません。我々は神によって、今日、ここに呼び出されたのですから。神の祝福の宣言がここにあります。

(記 説教要約奉仕者)